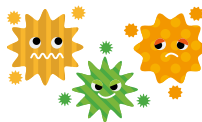


事例から学ぶ /

# 感染症対策



[執筆者]

堀 成美

ほりなるみ

国立国際医療研究センター 特任研究員

神奈川大学法学部、東京女子医科大学看護短期大学卒業。2009年国立感染症研究所実地疫学専門家コース (FETP) 修了。同年聖路加国際大学助教、2013年より国際医療研究センター感染症対策専門職、2015年より国際診療部医療コーディネーター併任。2018年8月より現職。

## 第5回 感染症対策の不足と過剰

私たちは目で見て何ともなければ「きれい」だと思ってしまうことがあります。顕微鏡で見たら、そこには細菌やウイルスなど私たちの体調を脅かすものがあつたとしても、です。目で見てわからず、匂いや音もしない敵にどう備え、戦えばいいのでしょうか。

接触で広がる感染への対策の基本は、まず「汚染するところをなるべく狭くする、汚染する機会を少なくする」ことです。そうはいってもリスクはゼロになりませんので、私たちがすべきことは、洗ったり消毒をしてキレイにすること。「なんだ、そんなの当たり前じゃないか」という人もいますが、実際にはわかっていてもできていない状況もあります。

### 事例①

#### 使用済みのオムツを自宅に持ち帰る

最近を持ち帰らずに済むように工夫をしている自治体も増えていますが、保育所から自宅に使用済みのオムツを持ち帰るといった習慣がまだ続いている所もあります。表向きは「親に排泄物の状態を見てもらい健康状態を知ってもらう」といった説明がありますが、健康な状態の便を観察する意味はありません。逆に、感染症が疑われるような下痢の便だったら、オムツ処理時には手袋使用、速やかな処分、直後の厳重な手洗いが必要で

す。不完全な保管や持ち運び、複数の人が触るなど、してはなりません。

日本では、集団生活の場である保育所での病原性大腸菌の感染拡大が度々報告されます。その都度、オムツ処理を含めた衛生管理の提案が行われていますが、実行され、再発防止につながっているのでしょうか。もちろん清潔のためだけでなく、子育て中の親の負担を減らすため、また帰宅後に親子のコミュニケーション時間がとれるよう、使用済みオムツは保育所で処理できるように社会が支援することも大切です。

### 事例②

#### 自宅での消毒

次に紹介するのは、前述の事例と逆の、しなくてもいいのに過剰に行われている消毒です。自宅で哺乳瓶や乳首を消毒している人たちがいます。病院や保育所など集団生活での衛生管理には必要なこともあります。自宅で食器や箸を消毒する必要がないのと同じよ

うに、哺乳瓶や乳首を消毒する必要はありません。よく洗って乾かしておけば大丈夫です。

また、食器洗いのスポンジを消毒することが必要であるかのようなテレビコマーシャルも見かけますが、実際には感染症対策としておすすめする根拠はありません。それでも気になるようでしたら、スポンジを使わないのも一つの手です。新聞紙やボロ布で油や汚れを拭き取る、スポンジの代わりに小さな使い捨ての布を使うなどの工夫ができます。

「やらないよりやったほうがまし」と誤解をしている人もいます。不要な場面で消毒剤を使用することは、安全としても、環境への負荷としても、避けたいところです。私たちが日常よく触るものの筆頭であるスマホや携帯電話。これらは消毒したり、触る度に手を洗ったりしませんよね。

必要な時、必要な感染管理ができるよう、場面ごとに提案し、実践していくことが大切です。

### 接触で広がる感染症の対策の基本

1. 汚染範囲を極力狭くする
2. 汚染機会を少なくする

さらに・・・「洗う」「消毒する」でリスクを減らす

